

## 住宅の快感

黒田清輝

住宅に就て到底纏まつた意見を、お話することは出来ない。私は自分の住宅として、誠に心持が可いと思ふことはあるも、建築そのものゝ場所と快感を與ふる季節と、周囲の關係から、自分がかう云ふ位置に建てたらばなどと思ふのみで、纏つた考へは、今日まで嘗て持つたことがない。

であるから到底他人の參考になるやうなお話は、勿論のこと出来ないが、只雜駁にお話することとする。今申した通り自分は住宅に就て纏まつた意見を持つて居ないから、如何なる場合に私が快感を感じたかと云ふ、二三の例を擧げて見やうと思ふ。

凡そ建築の様式と氣候とは、大變關係の深いものだらうと思ふ。私は二十歳前から三十歳近くまで、可なり長い歳月を外國に生活した、所謂書生々活、而も普通の書生よりも、大分程度の低い生活を續けて來たのであるが、兎角外國で受けた感覺が、頭腦に沁み込んで居るので、住宅の感じも外國式の方が、大體に於て心持がいゝやうに思ふのである。

つまりそれは、外國式の住宅に於て、多く愉快的境遇を経て來たからのことであるから、之れは自から冷静に考へて見ると、必ずしも外國式が、萬事いゝ譯ではない、日本式にも美點はあるが、境遇に依つて感じたのが、常に私の頭腦を支配して居るので先づ多くの場合外國式が先になるのである。

假りに、椅子に腰かけて生活すると云ふことは、日本人として幾分か窮屈であり、且つ不自然と感ずるであらうが、私は決して然うでない。身體を休むる場合に於ても疊の上に胡座を掻くのが嫌ひで長椅子に恁れかゝつた方が快い。更に一步進んで、疊の上に寝轉ぶよりは、佛語でカナツペと云ふ幅廣の椅子に仰臥するか或は寢臺の上に寝る方が、一層身體に樂なやうな氣がする。日常座臥に就ては、西洋式の方が私は心持が好い。

それから、季節に依つて春夏秋冬自から住み心地が違ふ。そこで始めて日本風の建築と、西洋風の建築と何方がいくかとの考へが、西洋鼻肩の私にも起つて来る。假りに西洋に行つたとすると、矢張西洋風の建築が、春夏秋冬に適當して居る。日本でも或時期の間西洋建築であつたら如何であらうかとの疑念を生ずる。其所がつまり、私が具體的に斯う云ふ建築がいくと云ひ兼ねる處なのである。

なぜならば、此の住宅と云ふものは、實際に自分が住つて見なければ、どうとも云へないものであつて、歸朝以來今日迄日本造に住まつて、日本に於て西洋建築に住まつた事のない自分は、西洋造が日本の氣候に、適當か不適當かは確言する事は出来ないが、只或る季節、殊に冬などは、西洋に居つた時のことを思ひ出して、西洋建築に住めば嘸ぞ良からうと、偲ぶことがある。

併し、昨今の如き夏の暑い日に西洋式の建築に住つて居たら、如何であらうかと考へることも、ないではないが、寒い冬の夜西洋風の愉快を思出すやうに、夏は左程に思はない住宅の中でも、各方面から考へて見てのことであるが日本の氣候で、夏向は日本造の方がいくかも知れぬ。汗の出る蒸し暑い時は、洋服を着て、靴を穿いて、壁で包まれたやうな部屋の中に這入つて居るのは、堪へ難いものである。浴衣一枚で、テントの少し氣の利いたやう

な、吹き通しの日本建築の中に横臥し、而も随時に湯殿で湯でも浴びると云ふのは、私のやうな西洋鼻屑でも、此の點だけは西洋建築も及ぶまいと思ふ。

私は前述の如く、未だ日本に於て西洋造に住はぬから、立派なことは云へないが、大體は西洋好きである。其の觀念は、衣服に就ての觀念と同じことで、平生窮屈のやうであるが、着馴れて居る所の洋服は、日本服よりも私には便宜で、又着心地がいい。仕事する時も其の通りで、精神の上から云ふも、洋服の方が幾らかキチツと身體が極まるやうな感じがする。

さらばとて夏の暑い時、家に休息する場合、矢張西洋式の方が住心地がいいかと云ふに、決して然うでない、靴どころか足袋を穿くのも蒼蠅さい著物一枚引懸けても暑苦しい。それでもシャツやネクタイを着けて居る方がいいとはどうしても思へぬ。斯う云ふ次第であるから、私は自分の好む處の住宅は、全然西洋式のものにすると、言ひ断つて了ふことも出来ない。それでは日本式が好きかと聽かれると、坐るよりも腰かける方が、夏冬共に好きである。冬だと云ふに、彼方此方開け放しする座敷は好まぬ。ストーブを圍んで夜話する西洋生活の愉快は、又格別なものである。之れだけ述べて來ると、私の理想は過半西洋式で、一部日本式と云ふやうなことに歸著する。つまり、和洋折衷と云ふやうなことになる。

洵に漠然として取止めのない事であるが、只私は住宅に就ての感じを述べただけで、夫れ以上には纏まつた話がない氣持の上から述べて見ると、先づ和洋折衷といった様な事になるが、何しろ日本に於て西洋建築に住むだ經驗のない私の事であるからどういふやうに折衷したらと云ふことは、考へたことがないので、今日お話することが

住宅の快感

出来ない。  
(四十五年七月談)

『建築工芸叢誌』七 大正元年八月